

聖書：ローマ 5：18～21

説教題：ひとりの従順によって

日時：2015年8月16日

ローマ人への手紙には、私たちが是非とも押さえておくべき重要な教理が語られている箇所がいくつもありますが、今見ている5章12～21節もその一つです。聖書は私たちが生まれながらにして罪人であると語っていますが、なぜそうであるかがここに簡潔に示されています。それは一言で言えば、最初の間人アダムが罪を犯したからです。12節に「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が入り」とあります。この「ひとりの人」とはアダムのことです。全人類のかしらとしての位置に立っていた人です。その彼が罪を犯した出来事は、彼と連帯している全人類が罪を犯したという出来事でもあった。その彼によって罪と死は全人類に広がりました。

これだけを聞くと、ほぼすべての人から文句の言葉が出て来るでしょう。我々は彼をかしらとして立てた覚えはない、と。しかしローマ書のこの部分が語っている素晴らしいメッセージは、人類のかしらとして立てられたのはアダム一人ではなかったということです。もう一人、神が立てた代表者がいる。それはイエス・キリストです。14節最後には「アダムはきたるべき方のひな型です」という言葉がありました。私たちはアダムから悪いものを受けたことで文句を言いたくなるかもしれませんが。しかし神はこのような方式で人類を扱われるからこそ、私たちは神が立てたもう一人のかしらに連なって救われることができるのです。私たちは、神は一人一人個別に扱ってくれた方が良くと思うかもしれませんが。神は一人一人にチャンスと責任を与えるべきであると。そう考えると確かにアダムから悪いものを受けなくて済みますが、一方でキリストから良いものを受け取る道も自分で閉ざしてしまうことになります。そして自分が罪を犯さなかったら問題ありませんが、一つでも罪を犯したら、もう救いは永遠にない！ということになってしまいます。これは恐ろしい考えです！しかし私たちはアダムとの連帯において良きものを失いましたが、キリストとの連帯において良きものを受けることができるのです。いや単にアダムにおいて失ったものを取り戻すだけではなく、キリストに結ばれることによって、はるかに勝る「満ちあふれる」と表現される祝福に生かされるのです。そのことが12～17節までの部分で語られました。

さて、今日の18節は、実は12節でパウロが語ろうとしたことの続きです。彼は12節で「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に」と述べて、それと同じようにも

うひとりの人キリストによって、云々…と語ろうとしたのですが、少し丁寧に説明する必要を感じて文章を途中で中断し、12節後半から脱線したのです。そしてその説明を前回の箇所を終えて、18節でもう一度、本来の文脈に戻って来たのです。ですから12～17節を読んで来た私たちは、この18節をすんなり理解できることでしょう。「こういうわけで、ちょうどひとりの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、ひとりの義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられるのです。」もはや説明を加える必要はないかと思いますが、一点だけ短く触れたいと思います。それは「すべての人」という言葉です。ある人は、アダムによってすべての人が罪に定められたように、キリストによって「すべての人が義と認められ」とあるから、全員が救われることになるのではないかと思います。しかしもちろんここはそういう意味ではありません。この「すべての人」という言葉は、次の19節では「多くの人」という言葉に置き換えられています。また前の17節では「恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は」と言われていました。18節が言いたいのは、アダムとキリストに見られる連帯性の考え方です。アダムの罪によってアダムに属する「すべての人」が罪に定められたのと同様に、キリストの義の行為によってキリストに属している「すべての人」が義と認められ、いのちに導かれるということをパウロは言いたいのです。

19節は18節の言い換えですが、注目に値するのは18節で「ひとりの義の行為」と言われていた部分が19節では「ひとりの従順」と言われていることです。ここにイエス様の義は、イエス様の従順に基づいていることを知らされます。「従順」とか「従う」というと、何か卑しい立場に置かれた人のことを考えるかもしれませんが。しかし聖書における「従順」は「愛」とセットで考えられているものです。アダムに与えられた善悪の知識の木に関する禁令でも、問われていたのはアダムの神に対する愛です。神が何一つ不自由なく、恵み豊かに愛して下さっている状況の中で、アダムは神を愛して歩むのかどうか。アダムは、当然神を愛すべき状況の中で、自らが主権者になり、神の上にのし上がろうとの欲望を心に抱き、神を愛していない自己中心の心を不従順の行為にさらけ出したのです。しかしそんな私たちの救いのためにキリストはこの世に来られて従順の生涯をささげてくださいました。私たちはイエス様が神だから、それが簡単にできたかのように考えてはなりません。イエス様は人としてこの歩みをささげられました。ですから荒野における誘惑で悪魔から「あなたが神の子なら、この石をパンに変えてみよ」とけしかけられた時、イエス様は「人はパンだけで生きるのではなく…」と答えられました。「人は」とイエス様は答えて、人としての、神にどこまでも信頼して生きる道を選んで進まれたのです。またイエス様の地上における生涯

はエデンの園に置かれたアダムの状況とは大きく異なり、墮落したこの世における生活でした。そこにはエデンの園にはなかったような様々な誘惑があり、また人々からの侮辱的な扱いがありました。しかし1ペテロ2章にありますように、イエス様は「のしられてもののしり返さず、苦しめられてもおどすことをせず」、神にこそ信頼を置く歩みを通されました。そしてその従順の生涯の頂点として十字架の死がありました。私たちが思うべきは、十字架の死にまでも従うというイエス様の生き方は、一朝一夕でできたものではなかったということです。ヘブル書5章8節に「キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学んだ」とあります。つまりイエス様の従順の生涯には発展があったのです。大工の息子として生まれ、人間として成長し、様々な試みに一つ一つ打ち勝つことを通して、神に信頼して従うという人間の生き方において少しずつ強くされていったのです。こうした取り組みを経ずにいきなり十字架についたなら、どうなっていたでしょうか。もしかすると十字架上で耐えられなくて「降ろしてくれー」と叫んだかも知れない。自らの悲運を嘆き、人々をのろって死んだかも知れません。しかしイエス様は父なる神に信頼して従うという従順の歩みを重ねて、その人としての性質は強くなっていき、その究極としてあの十字架の死をも忍ばれたのです。十字架上でもその戦いがいかに大きなものであったかは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」というあの叫びに現れています。しかしイエス様が最後に発された言葉は何だったのでしょうか。「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」という言葉でした。イエス様は自分のいのちを明け渡すことにおいても、父なる神への愛と信頼によってこのことを行なわれたのです。その光景を見ていた百人隊長は、異教徒であったにもかかわらず、「この方はまことに神の子であった」との言葉を口にせざるを得なかった。その死は普通の犯罪者のような死ではなく、父なる神への愛と従順に特色づけられたものであることを認めたのです。そういう意味でイエス様の十字架の死はイエス様の従順の生涯の結晶です。そこに人としての完全な生涯がささげられました。そのキリストの完全な義の生涯が、このかしらを信じて結びつく時、私たち一人一人のものとしてカウントされるのです。

さて、20節で「律法」のことが述べられていますが、これはユダヤ人からの反論を想定してのことでしょう。ユダヤ人にとって、人類の歴史をアダムとキリストという二人の代表で見る見方はあまりに簡単過ぎやしないか、その間にモーセがいるではないか！モーセにおいて与えられた律法は我々の救いに何の役割を果たさないのか！という問いがあったのでしょうか。それに対してパウロは、律法は私たちが救うためのものではないと言います。むしろ「律法が入って来たのは違反が増し加わるためです」

と。4章15節：「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」 律法がすることは罪を定義し、罪を犯している人を断罪することです。つまり律法を持つことは、その人を救いに有利にするものではなく、むしろその人を窮地に追い込むものなのです。しかし、これが律法を持つ人への神の最後の言葉ではありませんでした。19節後半：「しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。」 確かに律法によって人は責められます。罪が増し加わります。しかし神はそれで終わりとはされない。神は「罪の増し加わるところには恵みも満ち溢れさせる」という解決策、救いをきちんと用意してくださったということをパウロは言っています。すなわち律法はただ人を断罪する目的で与えられたのではない。それはその人をより豊かなキリストにある恵みへ導くためのものであるということです。ですから、自分の罪が分かることは良いことです。いや逆に自分の罪が分からなくてはダメなのです。なぜなら罪の増し加わるところに、恵みが満ち溢れるからです。そして私たちの罪がどんなに大きく、その現実がどんなに律法によってはっきり示されようと、キリストにある恵みの方がはるかに力強いということもこの御言葉は語っています。神はそんな罪に悩む者を救ってくださるためにキリストを送ってくださった。罪を指摘され、責められ、弱り果てているすべての者を、恵みで満ち溢れさせてくださるキリストを神は与えてくださったのです。皆さんはジョン・ニュートンという人の話を聞いたことがあると思います。有名な「アメイジング・グレイス」の歌詞を作った人です。彼は「驚くばかりの恵みなりき」と言います。しかしその後何とあったのでしょうか。「この身の汚れを知れる我に。」自分の汚れを知る人こそ、驚くばかりの恵みなりきと歌えるのです。

最後の21節はまとめの言葉とも言えます。日本語訳は少しまどろこしく感じますが、言われていることはこれまで見て来た「アダムにおける連帯」と「キリストにおける連帯」との対比です。アダムとのつながりにおいては罪が支配していました。私たちはみな罪の力の下にありました。その行き着くところは死でした。しかしキリストとの結合においては、信じる者の上に恵みが支配することになりました。この恵みの支配について2つのことが言われています。一つは「義を通して」。言われていることは恵みは安っぽくないということです。誰にでも、投げ売りたたき売りされるようにして与えられるものではない。恵みの支配は「キリストの義」を受け取った人に与えられます。そのためにはイエス・キリストが尊い犠牲を払ってくださいました。その犠牲があって初めて、その義を受け取った人にも恵みが注がれるのです。そしてもう一つのこと、この恵みの支配が向かう先は「永遠のいのち」であるということです。

ここにアダムにある人との何という対照があることでしょうか。片やアダムにある人に待っている運命は死です。しかし、片やキリストにある人に開かれている運命は永遠の命です！全く違った行き先、将来、方向性です。

もし私たちが生まれつきの人間のままなら、すなわちアダムと連帯しているだけなら、その上にあるのは罪の支配であり、死の支配です。そういう人の地上の生涯に起こる患難苦難は恐ろしい最後の前兆でしかありません。しかしそんな私たちにとっての救いがあります。私たちが結び付くべきもう一人のかしらが神によって立てられています。その方は私たちのために、私たちに代わって、人としての完全な従順をささげてくださいました。このかしらに結び付くなら、恵みが私たちの上に支配することになるのです。どんなに自分自身が罪深い存在でも、この方との連帯によって恵みが豊かに満ち溢れるのです。そのために私たちがすべきことは、この唯一の救いのかしらなるイエス・キリストのもとへ行くことです。この方とつながって、この方の完全な義を転嫁して頂くことです。その時、その人はいのちの世界へと導かれます。キリストにある満ちあふれるいのち、決して死に脅かされない永遠のいのちを得る歩みへと導かれるのです。